

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530794

研究課題名（和文） 小・中学校の総合表現型カリキュラムの開発と評価  
—日米の研究先進校をモデルとして—研究課題名（英文） The Development and Evaluation of Integrated Arts Curriculum for  
Japanese Schools: As Model of Advanced Research Schools

研究代表者

時得 紀子（TOKIE NORIKO）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：30242465

研究成果の概要（和文）：日米小・中学校の優れた授業実践の分析をもとに、身体性、参加性、音楽性、舞踊性、総合的表現など計 8 項目に、共同研究者らの質的記述を加えて、芸術 4 領域（音楽、美術、演劇、舞踊）のバランスの取れた技能習得のための評価観点を開発した。

両国の授業観察に基づくパフォーマンス評価や意識調査から、「音楽と舞踊と演劇」など、複合的な芸術領域にまたがる授業では子供の共同の創作表現がより活性化し、豊かな言語活動が広がる傾向が見られることが評価された。

研究成果の概要（英文）：In this paper, the author proposes new criteria and evaluation methods in order to expand this approach throughout Japan. In order to provide children with chances to study through practical experiences, the author proposes the cultivation of communication abilities through various activities. Also, she proposes that the main goal should be to develop and evaluate a model curriculum of music through the involvement and use of other art education such as dance and drama.

Key Words : Integrated arts curriculum, Communication skills, Curriculum Models, Musical, Multiple Intelligences

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1, 400, 000	420, 000	1, 820, 000
2008 年度	1, 000, 000	300, 000	1, 300, 000
2009 年度	1, 100, 000	330, 000	1, 430, 000
年度			
年度			
総計	3, 500, 000	1, 050, 000	4, 550, 000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：総合表現スキル，芸術教育の評価観点，パフォーマンス評価，日米モデル比較即興的創作活動，表現カリキュラム，言語活動の拡がり，Integrated Study

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1994年に全米教育標準という芸術4領域の画期的なスタンダードが設定されて以降、全米各地で独自の芸術教育の標準が次々と模索された。本論でもその分析の対象とした、ニューヨーク市の学校教育における芸術教育の基準を示す“Blueprint for teaching and learning in the arts”などもその一例である。

このように芸術4領域のスタンダードの設定以来、米国における、音楽教育を含む広義の芸術教育の活動が活発化している状況に着目した。

そしてその表現活動から子供に培われる様々な力の獲得に示唆を得て、我が国でもこうしたカリキュラム開発をめざすことは、次の(2)に述べる理由からも急務であると捉えた。

(2) 我が国の学校音楽の活動が、他教科との関連の希薄さや、西洋クラシック音楽の技能習得への偏向などから時数削減にまで追い込まれた状況を反省し、音楽教育の学会や大学教員組織の会議でも、今後は「広義のコミュニケーション力の育成」のために音楽科が新たな模索を行っていくべきとした指摘がなされるなど、教科学習の内容の改善が求められている。

## 2. 研究の目的

(1) こうした背景を受けて、我が国の音楽科のカリキュラム改善のための手立てのひとつとして、米国において展開される、広義の表現活動に着目した。そして、前述したような、芸術4領域の教育の評価基準を設定するという、未だ我が国で開発を見ない研究課題に挑むことを目標に掲げた。具体的には、総合表現活動を芸術の4領域、音楽性、美術性、舞踊性、演劇性、それぞれの高度化、完成度など全8項目からの観点で分析することで、芸術の各領域の達成度をはかる、表現の尺度を設けることをめざした。

加えて、教師教育はもとより、学校教育における芸術活動に音楽、美術（図工）と並んで、舞踊、演劇のジャンルを積極的に取り入れている米国のカリキュラム体系そのものを我が国にも導入するため、これらの複合的な学習の成果

を検証することも研究目的のひとつに掲げた。

(2) その実現のためには、舞踊や演劇の指導においても優れた環境を今後は我が国でも整えていく必要性から、4領域すべての芸術領域の達成度をはかるための我が国の現状を鑑みた評価観点の設定にも取り組んだ。そして、これら芸術4領域における、評価観点の項目の設定を活用した芸術教育のカリキュラム開発に向理論と実践の両面から取り組むことを本研究の目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 研究計画・方法は、無籐・時得の共同制作による、表現活動10項目の評価観点に、さらに研究代表者や分担者による質的な記述・評価を加え、優れた特徴を持つ日米研究先進校からの授業実践のモデルを抽出した。

(2) 並行して、日米研究先進校における総合表現活動の授業実践にかかわる児童・生徒、教師を対象に自己評価アンケートや意識調査を実施し、これらを実験観点の設定の際の参考要因とした。さらに日米の授業映像の分析を経て、優れた授業モデルを抽出し、カリキュラムの類型化を図った。

(3) サブ・テーマとしての研究では、表現活動の芸術的なスキル（技能面）の評価観点を明確化することをめざした。子供たちに付けたい力の観点、評価の観点を系統的に明確にしていき、表現活動のカリキュラムに一貫性を持たせることによって、子供たちの芸術領域の資質、能力（技能）を計画的に育成するための授業モデルについて、主として米国のカリキュラムと授業実践を参考としながら開発した。（図2. 参照）

(3) 本研究では、1年次に授業実践の類型化、2年次には表現活動の観点別の評価などを経て、3年次に代表的な実践事例をまとめた

類型別カリキュラムを作成した。

こうした日米の授業モデルの分析には理論と実践の双方向から、研究代表者および分担者がそれぞれの専門的見地から質的な検証や開発にかかわった。

#### 4. 研究成果

(1) 日米両国の小・中学校における総合表現型カリキュラムの研究先進校の実践を音楽、美術(図工)演劇、舞踊の4領域にカテゴライズし、バランスの取れた優れた授業モデルの分類を行った。

さらに、『我が国と米国の総合表現型カリキュラムの実践事例から4つの表現領域と各教科・領域へのおよその位置付け—(時得 2009)』と題し、日米の授業実践から抽出された約20の実践と芸術4領域とのかかわりを4輪の集合図に分類した。(図1. 参照)

これらの授業モデルは、我が国の研究先進校から「学際型カリキュラム」が既に定着している10校、米国からはNew York州, Connecticut州, Massachusetts州, Iowa州の各々約10校をめやすに抽出した。

(2) 主として米国の授業における、複合的な学習のもたらす成果について、両国での授業観察と子供たちへのパフォーマンス評価や意識調査を経て、本研究では多くの考察を得た。

紙幅の都合から、その一例を述べるならば、両国の実践のうち、「音楽と舞踊と演劇」など、複合的な芸術領域にまたがる授業では、子供たちの共同の創作表現がより活性化し、豊かな言語活動が拡がることなどが明らかとなった。

また、米国学校音楽に広く導入される「リトミック」、「オルフ」などの創作を重視した表現活動を取り入れた音楽学習は、子供の創造的な知性を育む上で有効であることが明らかとなったことも、音楽と舞踊などの複合的なアプローチの有効性を示すものであると捉えた。

(3) 国際学会における成果発表については、平成20年7月にイタリアで開催される、ISME (International Society for Music Education) 世界大会における招待発表の機会を得た。本研究の成果報告として、隔年開催のこの音楽教育国際学会に出席し、発信することができた。

(4) 平成21年3月には、『総合表現活動の理論と実践』の発刊を実現させた。この全国出版は、本研究の集大成の発表のひとつとなった。(ISBN 978-4-87788-402-4 音楽之友社)

編著者は研究代表者の時得紀子、理論編の執筆者は本研究の連携研究者である、無籐隆(白梅学園大学)、田中博之(早稲田大学大学院)、近藤フヂエ(新潟大学)、小林田鶴子(名古屋女子大学)が担当した。

さらに研究代表者は本研究成果の報告として2008年国際音楽教育学会(イタリア大会)、2009年同学会アジア・太平洋地区大会(上海大会)から招待発表の機会を受け、本研究の成果発表は高い評価を得た。

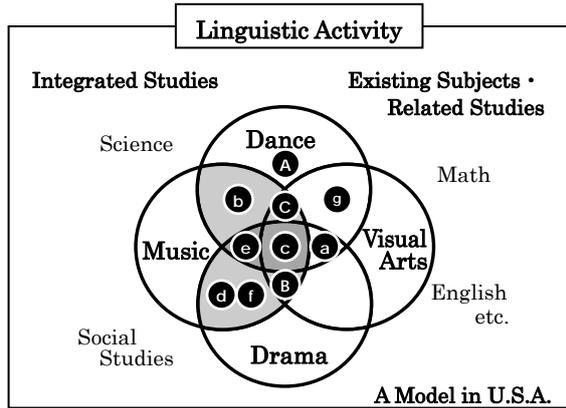
その学術的背景には、国際的レベルの潮流からも、音楽科が広く他教科・領域とかわる総合的・横断的な実践、“Integrated Study”の開発に教科再生の活路を見出そうとする各国のカリキュラム改善に向けた活発化があり、本研究は国際的な要請にも応えうる、貢献度の高い研究成果を発信できたものと捉える。

(5) 本研究を経て、今後の課題も明らかとなった。複数教科の関連のもとに取り組む学習方法として、既に米国で成果をあげている、ホール・ランゲージの発想を導入した事例を含む、「音楽と演劇」のかかわる音楽学習は、言語活動を積極的に導入する動きにある我が国にも示唆を与えることが見て取れた。

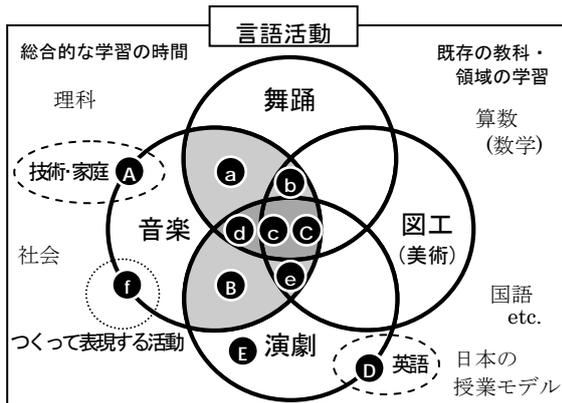
また、前述のように、米国学校音楽に広く導入されている、リトミックなどの身体表現活動を取り入れた「音楽と舞踊」のかかわる音楽学習やこれらの領域が複合的にかかわる音楽学習は、子どもの創造的な知性を育む上で有効であり、我が国でもこうした欧米の音楽教育メソッドを導入したカリキュラム開発が望まれ、今後の継続研究に生かしたい。

先述のように、国際的レベルの潮流からも、総合的・横断的な実践“Integrated Study”の開発へのカリキュラム改善に向け、本研究はそうした国際的な要請にも貢献できた。このたび、基盤研究(C)平成22-24年度の次期科研補助金を得たことを受け、本研究の成果を今後の継続研究にも生かしていく。

授業分析・カリキュラム評価の観点



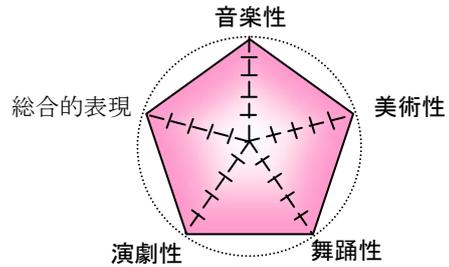
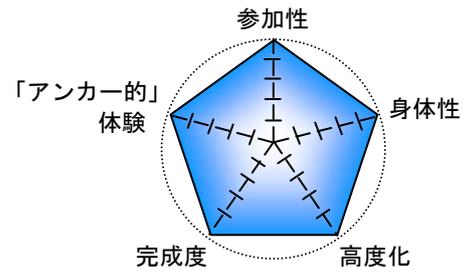
- |  |  |
|--|--|
| <b>New York City</b>                       | <b>New York City</b>                   |
| <b>a</b> P.S.83 (Public E.S.)              | <b>A</b> Little Red Schoolhouse J.H.S. |
| <b>b</b> Little Red Schoolhouse E.S.       | <b>Massachusetts, Boston</b>           |
| <b>Connecticut</b>                         | <b>B</b> The Roxbury Latin School      |
| <b>c</b> Wolcott E.S.                      | <b>Iowa City</b>                       |
| <b>d</b> Redding E.S.                      | <b>C</b> Northwest J.H.S.              |
| <b>Iowa City</b>                           |  |
| <b>e</b> James Van Allen E.S.              | E.S. = Elementary School               |
| <b>f</b> Weber E.S. <b>g</b> L.fellow E.S. | J.H.S. = Junior High School            |



- |                               |
|-------------------------------|
| <b>a</b> 上越市立高志小, 奈良女子大学附属小   |
| <b>b</b> お茶の水女子大学附属小          |
| <b>c</b> 東京学芸大学附属大泉小, 長岡市立才津小 |
| <b>d</b> 上越市立大手町小             |
| <b>e</b> 安曇野市立明北小             |
| <b>f</b> 新潟大学教育学部附属長岡小        |
| <b>A</b> 新潟大学教育学部附属長岡中        |
| <b>B</b> 阿波市立吉野中              |
| <b>C</b> 上越教育大学附属中(ミュージカル)    |
| <b>D</b> 上越教育大学附属中(笑劇場)       |
| <b>E</b> 大阪教育大学附属池田中(ドラマ科)    |

図1. 我が国と米国の総合表現型カリキュラムの実践事例から

4つの表現領域と各教科・領域へのおよその位置付け (時得 2009)



(補足説明)

- [1] 子どもの参加性
- [2] 子どもの身体性
- [3] 高度化 (優れた技能の獲得)
- [4] 完成度 (短期の完成性)
- [5] 「アンカー的」体験となる<sup>2)</sup>

図2. 無籐・時得 による, 総合表現活動の10項目の評価観点<sup>1)</sup> (無籐・時得 2007)

- 1 無籐 隆『オリンピック記念青少年センター・ワークショップ評価報告書』(2005) に基づき, 時得と共同で作成。
- 2) アンカーとは杭(くい), 船などの錨(いかり)。強烈な記憶体験。心に錨を降ろす, 長期的記憶に残る体験の例え。

5. 主な発表論文等 (研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件) (その他7件)  
 ① Noriko Tokie, Takashi Muto, Effectiveness of Integrated Arts Curriculum for Japanese Students and Plans for the Future Model in Japanese Schools: To Cultivate Communication Skills International Society for Music Education (ISME) July

21, 2008, Bologna, Italy 査読有, 国際学会 Proceedings, pp.297-303.

②Noriko Tokie, Integrated Arts Curriculum for Japanese Students and Plans for the Future Models : Cultivating Communication Skills 上越教育大学研究紀要 査読有, 第27巻, 2008, pp. 253- 260.

③時得紀子, 音楽学習における総合化へのアプローチ 総合芸術的な表現活動のもたらすもの—小・中学校における実践事例を通して—, 「学校音楽教育研究」シリーズ 『学校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会紀要, 査読有, Vol.12, 2008, pp.144- 145.

④時得紀子・小町谷聖 総合表現活動のもたらすもの —上越教育大学附属中学校「表現創造科」の実践から—上越教育大学研究紀要, 査読有, 第28巻, 2009, pp.243-256

⑤時得紀子, 水谷桂介, 中村浩, クロスカリキュラムを通じた表現の可能性 —英語の歌を教材とした創作活動を通じて— 教育実践研究上越教育大学学校教育実践研究センター 査読有, 第19集, 2009, pp. 9-18.

⑥時得紀子, 即興表現活動を視野とした授業実践の国際比較研究 「学校音楽教育研究」シリーズ 『学校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会紀要, 査読有, Vol.13, 2009, p.22-24.

⑦Noriko Tokie, The Importance of Integrated Arts Curriculum for Japanese Students: Increasing Motivation for Learning and Cultivating Self-Expression, Proceedings of the 7th World Conference of the APSMER Asia-Pacific Symposium on Music Education Research in Shanghai 2009, 査読有, 国際学会 Proceedings, pp.473-478.

ISBN978-7-80703-960-0

⑧時得紀子, 信谷準, 身体表現活動を取り入れた拍感の体得をめざす試み—小学校低学年の音楽科授業を通して— 上越教育大学学校教育センター実践研究, 査読有, 第20集, 2010, pp.27-36.

⑨時得紀子, 小林田鶴子, 内海昭彦 創って表現する活動」から「音楽づくり」へ—星野圭朗の実践をめぐる— 上越教育大学研究紀要 査読有, 第29巻, 2010, pp.309-319.

⑩時得紀子, 総合表現型カリキュラムの実践への一考察 兵庫教育大学大学院連合学校教育学

研究科 教育実践学論集, 査読有, 第11号, 2010, pp.155-16.

〔学会発表〕(計8件)(国内5件国際3件)  
①時得紀子, 幼少連携を視座とした表現教育の一考察—日米実践事例の現状を通して— 日本保育学会第61回大会 2008, 5月17日 名古屋市立大学

②Noriko Tokie, Effectiveness of Integrated Arts Curriculum for Japanese Students Music in Schools and Teacher Education Commission (MISTEC) July 17, 2008 Rome, Italy

③Noriko Tokie, Takashi Muto, Effectiveness of Integrated Arts Curriculum for Japanese Students and Plans for the Future Model in Japanese Schools: To Cultivate Communication Skills International Society for Music Education (ISME) July 21, 2008, Bologna, Italy

④Noriko Tokie, The Importance of Integrated Arts Curriculum for Japanese Students: Increasing Motivation for Learning and Cultivating Self-Expression, Proceedings of the 7th World Conference of the APSMER Asia-Pacific Symposium on Music Education Research in Shanghai, 2009.

⑤時得紀子, 即興表現活動を視野とした授業実践の国際比較研究—日本と米国アイオワ州との比較を通して— 日本学校音楽教育実践学会 第13回全国大会 2008, 8月24日 オリンピック記念青少年総合センター

⑥時得紀子, インプロヴィゼーションを取り入れた表現教育に関する一考察—米国公立・私立小学校・教員養成大学等への参与観察を通して— 日本音楽教育学会 第39回全国大会 2008, 11月9日, 国立音楽大学

⑦時得紀子, 教員養成大学における表現活動の実践の試みと課題, 日本ダルクローズ音楽教育学会 第9回研究大会 2009, 11月23日 東京学芸大学

⑧時得紀子, 総合表現活動のもたらすもの—上越教育大学附属中学校10年の取り組み

から一日本学校音楽教育実践学会 第12回全国大会 2007, 8月18日 ぐらしき作陽大学

〔図書〕(計4件)(その他3件)

①時得紀子, 平成21年度使用『中等科音楽教育法』中学校・高等学校教員養成課程用 2009, 全231p 時得担当 pp.132-133. 音楽之友社 ISBN978-4-276-82016-6

②時得紀子編著, 田中博之, 無藤隆, 小林田鶴子, 近藤フヂエ, 総合表現活動の理論と実践 2009, 教育芸術社(上越教育大学学術研究出版助成事業)全104p, 時得担当 pp.79-102.

③時得紀子, 浅見均編著 『子どもと表現』第2章 世界の表現教育 アメリカにおける表現教育 2009, 日本文教出版社 237p, 時得担当 pp.72-75

④時得紀子, 最新『中等科音楽教育法』中学校・高等学校教員養成課程用「総合的な学習の時間と音楽科 ミュージカルに取り組む活動事例から」2009 中等科音楽教育研究会編 音楽之友社 時得担当 pp.132-133. ISBN978-4-276-82016-6

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

時得 紀子 (TOKIE NORIKO)  
上越教育大学・大学院教育学部・准教授  
研究者番号: 30242465

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者

無藤 隆 (MUTO TAKASHI )  
白梅学園大学・子ども学部・教授  
研究者番号: 40111562  
田中 博之 (TANAKA HIROYUKI)  
早稲田大学 教育・総合科学学術院・教授  
研究者番号: 20207137  
近藤フヂエ (KONDOU HUDIE)  
新潟大学・教育学部・教授  
研究者番号: 50018842  
小林田鶴子 (KOBAYASHI TAZUKO)  
名古屋女子大学・文学部・准教授  
研究者番号: 20387666